

めだか談義

事務局長の、「みんなに伝えていきたいこと」2020・8・15



「風をつかまえた少年」という映画があります。アフリカの貧しい14歳の少年がある日、「ENERGY」という1冊の本に出会い、風車で電気を起こし、干ばつで苦しむ村を救うという実話だそうです。建築家の安藤忠雄さんは、この映画を見て、「そうなんだ、そうした1冊との出会いが子どもたちの未来のためには必要なんだ」と感動したそうです。

「わらの家の古本屋さん」は先日の田植えの時に、ささやかに店開きをしました。絵本の読み聞かせをキャンプファイヤーのときに実現させてくれた赤松尚子さんのアイディアの古本屋さん、なんとか定着させたいと思います。次のザリガニ釣りのときに、「わらの家」から出張開店、なども考え中です。こちらはヨチヨチの小さな小さな試み。その安藤忠雄さん、やってくれました。「子ども本の森」と名づけた図書館を、大阪のど真ん中、中之島にオープンさせたのです。設計と建築はもちろん安藤さんが手がけ、市に寄贈。運営費は、市の呼びかけに企業や市民から6億円もの寄付が寄せられたとのこと。昔から大阪は豪商たちがお上に頼らず、自らの資金と采配で「八百八橋」を架けたなどの文化があり、その公共精神が息づいているのだと、大阪生まれの安藤さんでさえ驚いたそうです。「森」とあるように蔵書は1万8千冊。選書はブックディレクターの幅充孝さん（この人も書籍の世界では一目置かれる人です）。安藤さんはこう言います。「子どもの成長にとって、最高の栄養は本だと思う」だから、「電子書籍は置かない。本の森が大事にしたいのは、便利さではなく、感動なのだから」とも。安藤さんのなかには自分を育てた大阪の街への恩返しの気持ちもあるんですね。「大阪の未来そのもの子どもたち」へのまなざしにあふれた「子ども本の森」、どんな1冊との出会いが生まれていくのでしょうか。楽しみです。

環境保護活動家のCWニコルさんのまなざしも「子どもたちの未来」に向けられていました。今年4月に故人になりましたが、40年の長きにわたり黒姫の山の再生に取り組んだ「アフターの森」プロジェクト。さきごろNHKで追悼の番組があり、改めて、感動させられました。彼の活動のなかに「5センス」と名づけたプロジェクトがあります。子どもたちを3日間ほど森にあずかり、生活をさせる、遊んでもらうプロジェクトです。五感を敏感に働かせる3日間になります。「自然欠乏症候群」と彼はいうのですが、ふだん自然に触れていない子どもたちは、集中できない、我慢できない、わがままになる、すぐキレてしまう、自分の感情を言葉にできない、一緒に遊べない、物を分け合うということが出来なくなってしまう、などなどの症状に現れると言います。彼の活動では、引きこもっていたり、虐待をうけていたりといった問題を抱えている子どもたちを中心に行われてきたのですが、これは、なにも、そうした特別な子どもたちの問題ではなく、都市型生活にはまり込んでしまっている子どもにも共通する問題提起ではないかと思うのです。引きこもりや虐待はないけど、何らかのストレスを背負いこんでいたり。森の中で子どもたちはさまざまな体験に出くわします。見たこともない生き物に遭遇したり、枯れ木のキノコに驚いたり、そんな空気の中で子どもたちの表情が変わっていくのだそうです。森に包まれる生活は、心の再生にも繋がっていくのだとニコルさんは強調しています。

「わらの家」の近くの水路で、水遊びに興じる子どもたち、ナマズやカエルや小さなサカナたちを追いかける子もいれば、すぐそばの水路でハンティング中のサギをじっと見つめる子がいたり、背丈ほどの稲わらの束を抱えてみたり、ザリガニにおっかなびっくり触れてみたり、そんな子どもたちの表情を見るのが、僕はたまらなく好きです。CWニコルさん、小田原の桑原というところでも、5センスプロジェクト、コツコツと展開中ですよ。

安藤忠雄さんと、CWニコルさんに、乾杯！